

長野県松本市

UENO

上野遺跡

—発掘調査報告書—

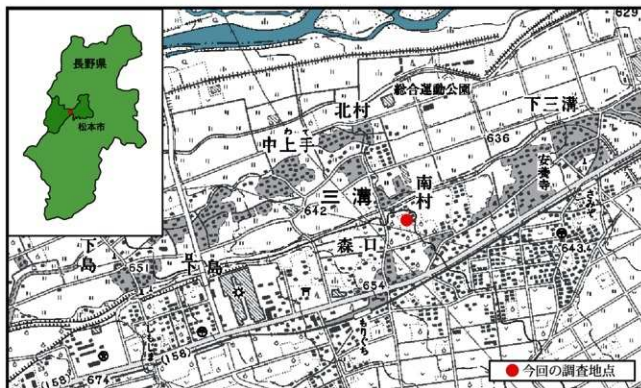


2021.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は令和元年8月19日～同年10月1日に実施された、松本市波田字上野 1808 番 2 に所在する上野遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は中部電力株式会社ネットワークカンパニー長野支社による送電線鉄塔移設工事に伴う緊急発掘調査であり、松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査、整理・報告書作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆分担については、以下のとおりである。
第三章第3節1・2：高山いず美、第三章第3節3：白鳥文彦、その他：吉澤せり子
- 4 本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。
遺物洗浄・注記・接合・復元：内田和子、中澤温子、古林舞香、三澤栄子
土器実測・トレース・拓本：直井知導 石器実測・トレース：佐々木正子、白鳥文彦
遺構図整理・トレース：荒井留美子、直井雅尚、古林舞香 遺物写真：宮嶋洋一
土坑・ピット一覧表：吉澤せり子 石器一覧表：白鳥文彦
DTP：荒井留美子、白鳥文彦、高山いず美、直井知導、吉澤せり子 総括・編集：吉澤せり子
- 5 本書で用いた略称は以下のとおりである。
第○号住居址→○住、第○号土坑→土○、第○号ピット→P○、サブトレンチ○→ST○
遺構図面上でのピットの番号は、単独のものを「P1」住居址付属のものを「P」のように記し区分した。
- 6 図中で使用した方位は真北を示す。また、遺構図中に示した国家座標値（世界測地系・第8系）は、東北太平洋沖地震後の補正值である。
- 7 土層色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』に準拠している。
- 8 本調査で得られた出土資料及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市大字中山 3738-1 TEL 0263-86-4710）に収蔵されている。



第1図 遺跡の位置 (S=1/15,000)

目次

例言	
目次	
第Ⅰ章 調査の経緯	
第1節 調査経過	3
第2節 調査体制	3
第Ⅱ章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査成果	
第1節 調査方法と概要	6
第2節 遺構	8
第3節 遺物	14
第Ⅳ章 総括	19
写真図版	
報告書抄録	

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査経過

中部電力株式会社電力ネットワークカンパニー長野支社（以下「中部電力」という。）により、松本市波田字上野1808番2で送電線鉄塔移設工事が計画された。事業予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である上野遺跡に該当するため、松本市教育委員会（以下「市教委」という。）が事前に試掘調査を実施したところ、予定地内に埋蔵文化財が残存していることが判明した。工事により遺跡が破壊される恐れがあり、8月8日付で長野県教育委員会（以下「県教委」という。）から埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査実施の指示を受けた。また、市教委と中部電力は協議を行い、発掘調査とこれに係る事務処理については市教委が実施することとし、中部電力と松本市の間に8月9日付で発掘調査業務の委託契約が締結された。

現地での発掘調査は、令和元年8月19日～10月1日に実施した。調査終了後、令和元年10月3日付で県教委に終了報告書を提出した。また、10月1日付で埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、10月29日付で県教委より埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。それを受け令和2年4月8日付で出土文化財譲与申請書を県教委に提出し、4月13日付で出土文化財の譲与についての通知を受けた。

第2節 調査体制

〈令和元年度〉

調査団長 赤羽郁夫（松本市教育長）

調査担当 吉澤せり子（事務員）、古林舞香（嘱託）

発掘協力者 朝倉秀明、大沢千尋、黒崎奨、坂口ふみ代、鳥井和幸、百瀬二三子、矢野芳徳

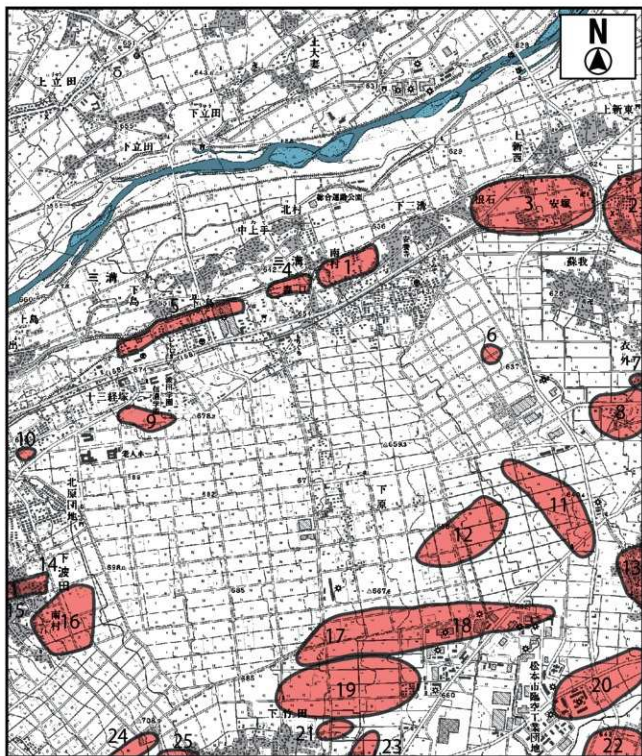
事務局 文化財課：大竹永明（課長）、竹内靖長（埋蔵文化財担当係長）、百瀬耕司（主査）、吉見寿美恵（嘱託）

〈令和2年度〉

整理担当 吉澤せり子（主事）、高山いず美（会計年度任用職員1類）、白鳥文彦（同）、直井雅尚（同）

調査員 宮嶋洋一 整理協力者 荒井留美子、内田和子、三澤栄子、中澤温子、佐々木正子、直井知導

事務局 文化財課：竹原学（課長）、三村竜一（埋蔵文化財担当係長）、百瀬耕司、吉見寿美恵



- | | | |
|----------|----------|-----------|
| 1 上野 | 10 見付久保 | 19 三夜塚 |
| 2 秋葉原古墳群 | 11 和田下西原 | 20 三間沢川左岸 |
| 3 安塚古墳群 | 12 中西原 | 21 堀ノ内 |
| 4 藁原 | 13 和田太子堂 | 22 川西開田 |
| 5 波田下島 | 14 権現 | 23 北竹原 |
| 6 下柳原 | 15 五十畝 | 24 北唐沢 |
| 7 衣外古墓址 | 16 麻神 | 25 神明 |
| 8 西和田 | 17 波田下原 | |
| 9 御殿場 | 18 下原 | |

第2図 周辺遺跡 (S=1/25,000)

第二章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

上野遺跡が所在する波田地区は松本市の中央にあり、松本盆地の南西に位置している。西は飛騨山脈に属する山々が連なり、東は唐沢川が形成した扇状地が松本平に向けて広がる。北は西の山地から東の平地へ流れる梓川の開口部にあたり、その縁辺には数段の河岸段丘が平行している。南は西から東へ下流する唐沢川が、隣接する山形村との境界線を作っている。このように、波田地区には北を流れる梓川が形成した河岸段丘と、南を流れる唐沢川が形成した扇状地が発達し、遺跡の立地に適した地形が成されている。ここに年代差をもつ遺跡が数多く分布しており、中でも上野遺跡は河岸段丘に属する遺跡にあたる。

上野遺跡が位置する梓川右岸（梓川の南側）には、高い順から洪積世末期の波田面、波田面を切る浸食段丘面である終末期の森口面、沖積世以降の上海渡面、押出面の4面の河岸段丘が形成されている。このうちロームに覆われているのは波田面と森口面のみである。また、波田面と森口面は広く分布しているが、上海渡面は梓川沿いに小規模に分布している。最も新しい押出面は現在の梓川の氾濫原と考えられ、しばしば洪水に見舞われた痕跡が残っている。上野遺跡が所在するのは上から2段目の森口面である。この森口面には3つの大規模な縄文集落遺跡が東西に並んでおり、上野遺跡はその東端に位置する。

今回の調査地点は上野遺跡の西端に位置し、50mほど西には草原遺跡が広がる。標高は650m程度である。

第2節 歴史的環境

松本平の西南山麓部は縄文時代の大規模な遺跡が多く残る（第2図1～25参照）。特に、4面の河岸段丘のうち最も古い波田面には、縄文時代の遺跡が多数点在する。波田地区周辺では、下柳原遺跡（6）、御殿場遺跡（9）、見付久保遺跡（10）、和田下西原遺跡（11）、中西原遺跡（12）、権現遺跡（14）、五十畝遺跡（15）、麻神遺跡（16）、波田下原遺跡（17）、下原遺跡（18）、三夜塚遺跡（19）、堀ノ内遺跡（21）、川西開田遺跡（22）、北竹原遺跡（23）などが挙げられる。

上野遺跡が含まれる森口面には、上野遺跡（1）、草原遺跡（4）、波田下島遺跡（5）という3つの縄文集落遺跡が東西に並んでおり、上野遺跡はその東端に位置する。西端の波田下島遺跡では平成7年に発掘調査が行われており、縄文時代前期末から中期の竪穴住居址と縄文土器が確認されている。中央の草原遺跡では昭和39～54年に松高学園高等学校による計12回の学術調査と、昭和55年に道路整備事業に伴う緊急発掘調査が行われており、縄文時代中期から後期の集落址が確認されている。また、竪穴住居址のほか敷石住居址が複数見つかると、土偶や彫形土製品などの遺物も出土している。

上野遺跡での発掘調査は今回が初となるが、これまでの現地踏査では縄文土器片や石器が採集されており、遺物の時期などから縄文時代中期を中心とした遺跡であると推定されてきた。

この周辺地域で確認された縄文時代以降の遺跡では、上野遺跡の東に古墳時代末期の秋葉原古墳群（2）や安塚古墳群（3）が広がっている。また、上野遺跡の西隣に位置する草原遺跡では平安後期の竪穴住居址のほか、中世の墓塚やそれに伴う内耳土器、中世陶器、古銭、鉄鏃なども出土しており、さらに西の波田下島遺跡でも昭和46年の分布調査で平安時代の土師器が確認されている。

【参考文献】

- 波田町教育委員会 1980『長野県東筑摩郡波田町草原遺跡緊急発掘調査報告書』
- 波田町教育委員会 1995『草原遺跡Ⅱ 緊急発掘調査報告書』
- 波田町教育委員会・長野県梓川高校 1995『下島（梓川高校敷地内）遺跡 一縄文時代前期末住居址の発掘一』
- 長野県史刊行会 1983『長野県史 考古資料編 全1巻③ 主要遺跡（中・南信）』
- 波田町誌編纂委員会 1983『波田町誌自然民俗編』

第三章 調査成果

第1節 調査方法と概要

1 調査範囲

今回の送電線鉄塔移設事業は、上野遺跡に該当する2カ所の地点で掘削を伴う工事が行われるものである。今回の調査では、工事の掘削が及ぶ範囲を調査対象とした。2つの調査区のうち北東側をA区、南西側をB区と設定した。調査面積は、A区は85.440㎡、B区は168.887㎡である。

2 調査方法

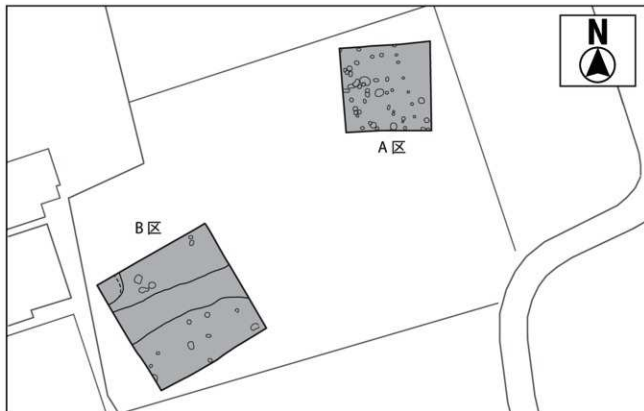
遺構検出が可能な深度までパワーショベルで表土を除去した後、人力での遺構検出と遺構の掘り下げを行った。遺構の番号は種類ごと検出順に付し、今回は第1次調査であるため竪穴住居址は1号からとした。遺構の記録は、測量図の作成と写真撮影を行った。調査はA区、B区の順で実施し、それぞれ測量・記録終了後にパワーショベルで調査区を埋め戻して調査を終了した。

3 測量・記録方法

遺構測量にかかわる基準として、国家座標（世界測地系・第8系・東北太平洋沖地震後の補正值）を用いた。B区中央に既設された測量基準点 $X = 23605.080$ 、 $Y = -55477.445$ を原点 NS 0、EW 0 とし、この点を基にA区南東とB区南西にそれぞれ基準点 $X = 23624.466$ 、 $Y = -55449.685$ と $X = 23599.507$ 、 $Y = -55483.486$ を設置した。標高については、調査区南西に水準点 BM = 650.000 を設定した。

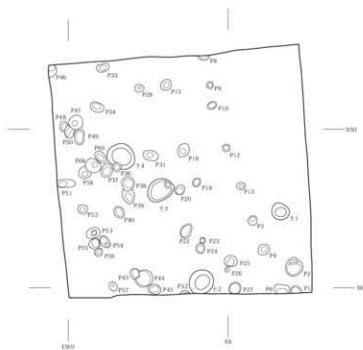
遺構図、礎・遺物出土状況図の測量は主に光波測距儀を用い、部分的にグリットを設定した。遺構配置図は $S = 1/100$ とし、土層図、礎・遺物出土状況図・遺構完掘図は $S = 1/20$ で作成した。

写真は発掘作業の各段階と遺構等の遺物出土状況及び完掘状況、調査区全景をフィルムカメラとデジタルカメラで撮影した。

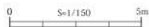
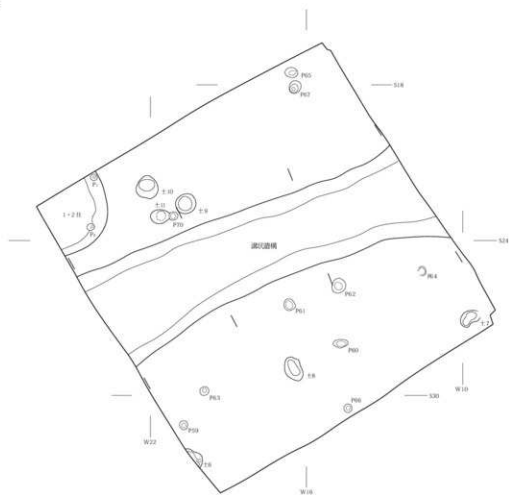


第3図 調査地の位置 (S=1/400)

A区



B区



第4図 調査区全体 (S=1/150)

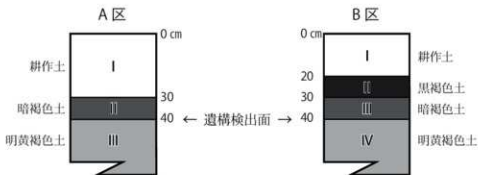
第2節 遺構

1 概要（第4・5図、写真図版1・2）

今回の調査では、縄文時代中期中葉～後期の遺構を確認した。

標準土層は、表土・耕作土（暗褐色土）、遺物包含層（暗～黒褐色土）、地山（明黄褐色土、ローム）の3～4層で構成され（第5図、写真図版2参照）、A・B区ともに検出面を明黄褐色土層の上面に設定した。

調査区全体では、竪穴住居址2軒、土坑10基、ピット58基、溝状遺構1条が検出された。内訳としては、A区では土坑4基、ピット48基、B区では竪穴住居址2軒、土坑6基、ピット10基、溝状遺構1条が確認されたが、A・B区ともに東側に攪乱を受けていた（第4図、写真図版1参照）。A区に対してB区からは竪穴住居址や調査区を横断する溝状遺構など、比較的大型の遺構が検出された。しかし、検出された遺構の数は少なく、溝状遺構より南側はピット・土坑埋土の土色もはっきりしなかった。



第5図 調査地の標準土層図

2 竪穴住居址（第7図、写真図版3）

B区の西端から確認された。土層の違いから、これらは2軒の住居址が切り合ったものであると判断した。1軒目の跡地に2軒目が建てられた可能性が考えられる。ただし、1住の覆土である第1層と第5層の下面に床面とみられる硬化面は確認できなかった。調査区内で確認できた範囲は全体の4分の1程度とみられ、その規模は直径4～5mほどであると推測される。

出土遺物は、縄文土器の破片や、打製石斧、搔器などの石器を確認した。

(1) 第1号住居址

深さは検出面から20～30cm程度であり、同一レベルで礫が数点確認された。1住の覆土である第1層と第5層の下面に床面とみられる硬化面は確認できなかったが、柱穴とみられる直径10～15cmほどのピットが住居の東側と南側の平坦面から2基、西壁から1基検出された。1住から検出されたピットの番号はそれぞれP₁、P₂、P₃とした。出土した礫は丸みのある河原石と人為的に割られたとみられるもので、割り石に関しては直径5～10cm程度の大きさで、中には被熱したとみられる赤みがかったものも確認された。

遺物は縄文時代中期中葉の土器片と打製石斧が出土している。

(2) 第2号住居址

深さは検出面から40～50cm程度である。壁は住居らしい立ち上りではあるが、床面にピットはみられなかった。床面からは直径10～15cmほどの礫が多量に出土したが、その多くが自然石の割れたものであり、被熱したものはみられなかった。本址の埋土最下層（第7図、住居址の土層番号8に相当）にはロームの塊が大量に混ざっていた。

遺物は、縄文時代中期中葉の土器片と黒曜石の搔器が出土している。

3 土坑・ピット (第1・2表、第6～8図、写真図版2～3)

今回の調査では、検出段階で概ね直径50cm以上の穴を土坑、直径50cm未満の穴をピットとした。これらの平面形・規模・他遺構との新旧関係等については、第1表と第2表の一覧表を参照されたい。

(1) 土坑

A区から4基、B区から6基が検出された。平面形態は円形が4基、楕円形が3基、不整形が3基であり、方形は確認されていない。土坑からの遺物は、土2～4の3基で土器が出土した。出土した土器の時期から、縄文時代の中期中葉～後期の遺構であると推測される。

特記すべき土坑としては、A区の土4が挙げられる。平面形は直径1m前後のほぼ円形で、検出面からの深さは30cmほどである。埋土からは深鉢が良好な状態で出土した(第9図3、写真図版2・4参照)。また、A区の土2では直径約1m、深さ25cm近くある円形の土坑上層から直径30cmほどの石が出土した(写真図版2参照)。これに似たものとして、B区でも長径約70cm、短径約52cm、深さ約10cmある土11の底部から直径20cmほどの石が2つ出土している(写真図版3参照)。

(2) ピット

A区から48基、B区から10基が検出された。平面形態は円形が38基、楕円形が18基、不整形が2基であり、土坑と同様に方形は確認されていない。ピットはA区に集中して分布しており、特にA区の東側では、P3・4・6・10・12・13の6基のピットが一直線の列状に並ぶ様子が確認された(写真図版2参照)。ただし、これらのピットの周辺には攪乱が多いことから、ピット列ではなく、検出可能範囲のピットが列状に視認されたという可能性も考えられる。

ピットからの遺物は、P15・22・33・36・53の5基からは土器片が、P48・56の2基からは石器が出土した。これらも、出土した土器片から縄文時代の中期中葉～後期の遺構であると推測した。

4 溝状遺構 (第8図、写真図版3)

幅約3m、深さ約30cmの東西にのびる溝状遺構をB区から1条確認した。東側上層の一部が攪乱に切られており、その部分は推定で掘り下げた。4カ所で土層の確認を行ったところ、覆土に砂礫層はなく、水が流れていた痕跡はみられなかった。しかし、覆土の底部には灰褐色の土層が見られ(第8図、写真図版3参照)、滞水があったことが窺える。段丘に並行する向きや規模などから、本址は人為的に掘削されたものである可能性が高い。この遺構の時期や用途は不明だが、規模からみて遺跡外までのび続ける可能性も考えられ、近隣の遺跡との関係が注目される。

遺物は石器、縄文土器片、中世の内耳鍋や陶磁器などが出土しているが、これらが掘削や埋没時期を示すものとは断定し難い。



A区土4 作業風景

土坑No	調査区	平面形	規模 (m)			新旧関係		出土遺物	備考
			長径	短径	深さ	本址より旧	本址より新		
1	A	円形	70	59	18				
2	A	円形	91	(90)	24			土器 100g	第9区：14・15
3	A	楕円形	104	83	13			土器 108g	第9区：2・16
4	A	円形	102	97	28		F36	土器 763g	第9区：3を含む
6	B	楕円形?	93	(38)	10				
7	B	不整形	(77)	43	17				
8	B	不整形	99	62	23				
9	B	円形	80	71	22				
10	B	不整形	86	73	24				
11	B	楕円形?	(71)	52	9		F70		

測量数値

5は欠番

<>：残存値

第1表 土坑一覧表

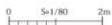
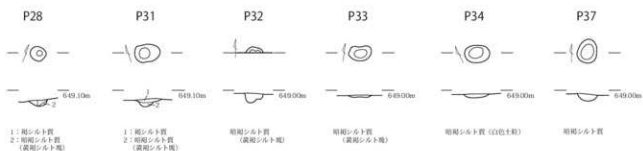
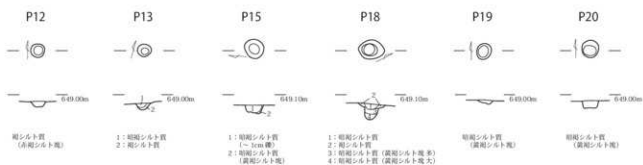
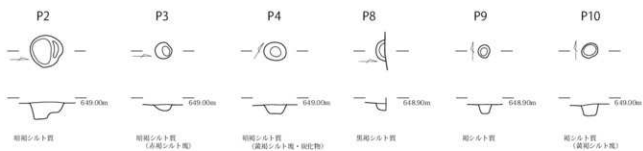
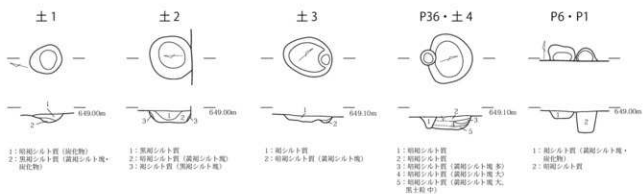
P/N	調査区	平面形	規模 (m)			新旧関係		出土遺物	備考
			長径	短径	深さ	本址より旧	本址より新		
1	A	不整形	44	(27)	45				
2	A	円形	70	68	36				
3	A	円形	36	34	12				
4	A	楕円形	48	39	19				
6	A	不整形	56	(31)	15				
8	A	楕円形?	46	(18)	14				
9	A	円形	26	25	19				
10	A	円形	36	32	23				
12	A	円形	30	29	12				
13	A	円形	30	27	14				
15	A	円形	42	39	18			土器 9g	
18	A	楕円形	56	42	34				
19	A	円形	35	31	8				
20	A	円形	38	36	16				
22	A	楕円形	56	40	7			土器 29g	第9区：5
23	A	円形	23	23	20				
24	A	円形	40	36	8				
25	A	円形	50	44	11				
26	A	円形	22	20	9				
27	A	円形	50	46	35				
28	A	円形	34	30	12				
31	A	楕円形	55	38	17				
32	A	楕円形?	38	(12)	20				
33	A	楕円形	49	30	4			土器 14g	
34	A	楕円形	54	37	8				
36	A	円形	33	32	24	土 4		土器 18g	第9区：17
37	A	円形	51	43	15				
38	A	円形	55	48	8	F39			
39	A	楕円形?	(50)	45	21		F38		
40	A	楕円形	48	35	26				
43	A	円形	41	38	28	F44			
44	A	円形?	68	47	13		F43		
45	A	円形	46	40	12				
46	A	楕円形?	49	30	21				
47	A	円形	54	50	19	F50			
48	A	円形?	58	(26)	9		F50	右器1点	第10区：8
49	A	楕円形	59	37	14				
50	A	円形?	42	(38)	18	F48	F47		
51	A	楕円形?	(60)	28	13				
52	A	円形	40	34	11				
53	A	楕円形	57	35	25			土器 29g	第9区：4
54	A	楕円形	55	35	19				
55	A	円形	47	40	6				
56	A	円形	34	30	24			右器1点	
57	A	円形	35	29	13				
58	A	円形?	41	(37)	18		F68		
59	B	円形	34	30	7				
60	B	楕円形	57	33	5				
61	B	円形	47	40	5				
62	B	円形	57	54	9				
63	B	円形	37	31	13				
64	B	円形?	36	(24)	5				
65	B	楕円形	47	33	12				
66	B	円形?	34	(20)	14				
67	B	円形	54	40	32				
68	A	円形	62	52	19	F58			
69	A	楕円形	51	32	10				
70	B	円形	29	28	10	土 11			

測量数値

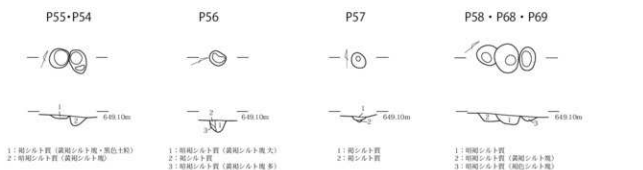
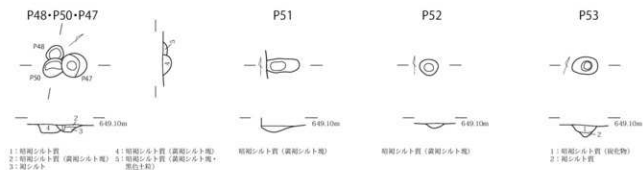
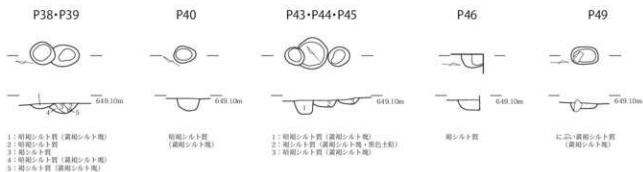
5, 7, 11, 14, 16, 17, 21, 29, 30, 35, 41, 42は欠番

<>：残存値

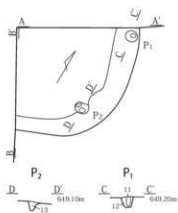
第2表 ビット一覧表



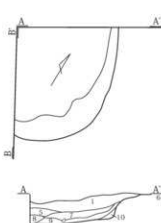
第6図 遺構(1)



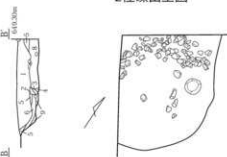
第1号住居址



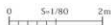
第2号住居址



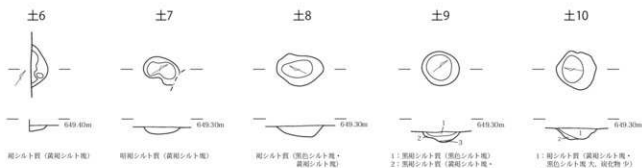
2住礎出土図



※土層2~4はP5の覆土
土層1・5は1住の覆土



第7図 遺構(2)



溝状遺構



ST3



東壁



第8図 遺構(3)

第3節 遺物

1 概要

縄文土器・石器を中心に、中近世の遺物も少量出土した。総数はコンテナ1箱、総重量は6.5kgを量る。中近世の遺物は東海地方のこね鉢、古瀬戸前期皿、内耳鍋、近世染付があるが、小片で図化不能であったため掲載は省略した。以下、縄文土器及び石器についてそれぞれ記していく。

2 土器（第9図、写真図版4）

今回の調査で出土した土器は総量4.85kg、遺構に伴うものは1.71kgであり、他は遺物包含層、検出面、表探、試掘時の出土である。縄文土器の時期は中期中葉が主体で他に中期後葉、中期末～後期が伴う。これらのうち図化可能なものは実測図、破片は文様構成が判別可能なものを拓影で掲載した。

(1) 中期中葉

13点を掲載した（第9図1・3・6・9～15・21・22・26）。本調査の出土土器では最も多くを占める時期であるが、遺構に伴うものは6点のみである。住居址に伴うものは1住が1・12、2住は13の3点。1は深鉢の口縁部片で表面が剥離する。12は胴部小片で隆帯と沈線で描かれ、隆帯に刻みがある。13は幅広い隆帯と沈線で区画、隆帯に刻みが施される頸部片である。3は土4中央部埋土内からやや傾いた状態で出土した深鉢である。胴部は幅広い隆帯で縦系統に区画し、区画内を細い沈線で充填する。一部には渦状の沈線とキザミ、交互刺突文が認められる。口縁部から胴部にかけて隆帯が繋がり、刻みが施される。14・15は土2出土の口縁部片であり、太めの隆帯による区画内を太さの異なる沈線で充填する。その他遺構外出土のうち、6は無文の深鉢底部である。内面の一部に煤が付着している。10は焼町土器の深鉢胴部片であり、突起部から隆線が繋がり、地文は特徴的な半隆起沈線によって埋められる。11は胴部が大きく膨らみ頸部がくびれる壺形の土器である。地文を縄文で充填する他、胴部には隆帯による渦状と思われる文様や、円形の隆帯を刺突文で囲った文様が配置される。いずれも異なる文様であり、連続性は認められない。頸部突帯には大き目の刺突文がある。この他は小片で、隆帯と太さの異なる沈線で施文される。

(2) 中期後葉

4点を掲載した（2・17・23・27）。2は土3出土の唐草文の隆帯部の上に無文帯がある深鉢の胴部片、17はP36出土の口縁部片、遺構外出土の23・27は胴部片でそれぞれ唐草文系土器の一部と考える。

(3) 中期末～後期

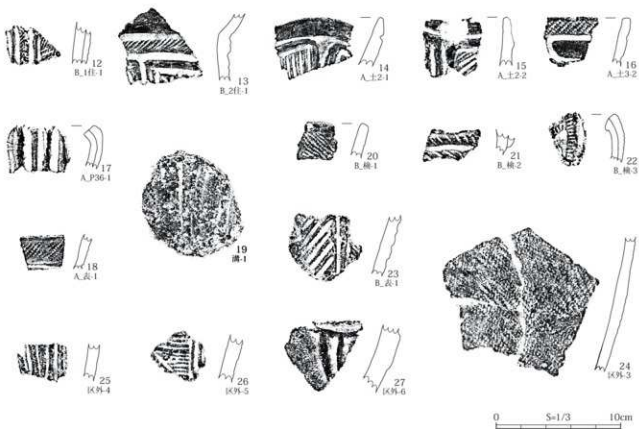
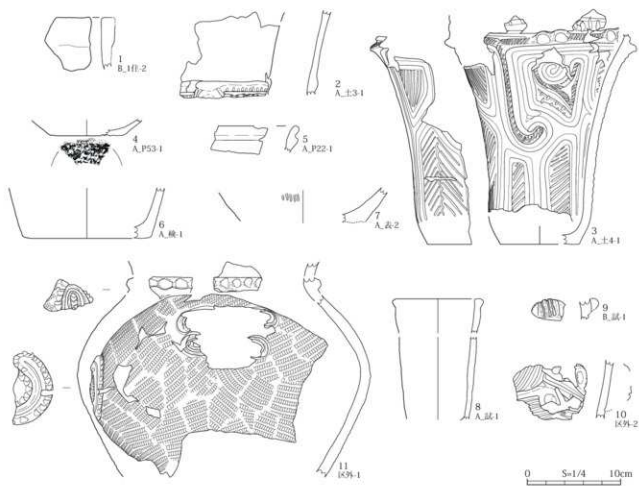
8点を掲載した（4・5・7・8・16・18・20・25）。4は底部片で胎土が薄く、網代痕が残る。5は深鉢口縁部片で表面は磨かれている。7は胴部に縄文がある深鉢胴部～底部片、8は文様のない深鉢で全体に被熱し、内面は丁寧な磨かれている。16・18は沈線と縄文で施文、20は地文に縄文が充填された口縁部片であり、後期に属するものと推測される。25は沈線で描かれる小片である。遺構に伴うものは4がP53、5がP22、16が土3出土の3点のみである。

(4) その他

19は溝状遺構出土の底部片で網代痕が認められる。24は地文が縄文で埋められた胴部片で、調査区外の出土である。19は中期～後期、24は中期中葉または中期末と推測されるが、詳細な時期の判別は難しい。

【参考文献】

山口遼弘 2008『新巻・焼町系土器』『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
松本市教育委員会 2020『麻神遺跡 一第3次発掘調査報告書一』



第9図 土器

3 石器（第3表、第10図、写真図版4）

今回の調査で、合計30点の石器が出土した。器種の内訳は、削器1点、搔器2点、打製石斧6点、磨製石斧1点、磨石類1点、砥石3点、敲石1点、石核3点、二次加工ある剥片2点、原石2点、剥片8点がある。このうち遺存状態のよい定型石器を中心に9点を図示し、概要を述べる。それ以外のものは一覧表を参照されたい。石器の帰属時期は共伴する土器に準じるものと考えられる。

(1) 削器 (1)

1は、刃部の角度が緩斜度（概ね60度未満）のため、削器に分類した。チャート製で1/4程度欠損している。加工部位は末端である。両面からの加工が見られるが、主に背面からの加撃によって刃部を作出している。刃部の形状は直刃、刃部の長さは5.98cmである。

(2) 搔器 (2・3)

2・3は、刃部の角度が急斜度（概ね60度以上）のため、搔器に分類した。2はチャート製の完形品で、加工部位は打面部である。加工は両面から施されているが、背面からの加撃が多い。刃部の形状は直刃で、刃部の長さは1.40cmである。3は黒曜石製の完形品で、縦長剥片を素材にしている。末端縁に腹面からの加撃で刃部を作出している。刃部の形状は直刃で、刃部の長さは1.34cmである。

(3) 打製石斧 (4～7)

4は、安山岩製、5～7は、ホルンフェルス製の打製石斧で、いずれも完形品である。4の平面形は胴部がやや膨らんだ撥形を呈し、自然面が一部に見られる。刃部は急角度の円刃で、刃縁から側縁にかけて、磨滅痕が観察される。5は、平面形は棒状を呈している。刃部は急角度の斜刃で、使用によると考えられる線条痕が刃面に、磨滅痕が刃縁から側縁にかけて確認できる。6の平面形は胴部が膨らんだ撥形を呈す。刃部は急斜度の円刃で、側縁には磨滅痕と、局所的な剥離が見られるが、使用による磨滅、刃こぼれと推測される。7は、平面形が撥形を呈する。加工は刃部と側縁部、基部にのみ施され、表面のほとんどの部分で自然面が見られる。刃部は急角度の斜刃で、刃縁には磨滅痕が観察される。

(4) 磨製石斧 (8)

8は、頁岩製の完形品である。胴部の断面形は扁平長方形で、平面形は最大幅が中央にある左右対称形である。刃部は、断面形が両凸刃で、平面形は急斜度の円刃である。基部はほぼ平基である。全体が研磨されており、自然面は残存していない。刃縁から側縁にかけて、使用によると考えられる剥離が見られる。

(5) 磨石類 (9)

9は、砂岩製で、1/4程度欠損している。平面形、断面形は楕円形で、自然礫を素材にしている。使用や加工による大きな形状の変化は見られない。磨面が表面と裏面に、敲打痕は表面と裏面、側面に見られる。

今回の調査地周辺には、西隣に草原遺跡、南西に麻神遺跡がある。両遺跡とも、上野遺跡とほぼ同時代の遺跡で、石器を多数出土している。今回の調査で出土した石器の出土状況と、両遺跡の出土状況を比較すると、打製石斧の多い点が共通している。草原遺跡では、現在まで14回発掘調査が行われ、定型石器は約180点出土している。そのうち、打製石斧は71点出土しており、全体の1/3以上を占める。麻神遺跡は3度発掘調査が行われ、石器は、剥片類を除けば、合計681点出土している。打製石斧は254点出土し、こちらも全体の1/3以上を占める。今回の調査で出土した石器の総数は、30点と少ないが、中でも打製石斧は6点出土している。剥片類の10点を除けば、全体の1/3近くを数える。少数ではあるが、打製石斧の占める割合は大きく、草原遺跡、麻神遺跡の傾向とも共通している。

中部地方の中期～後期の縄文遺跡では、打製石斧の出土量が多く、石鏃、石匙が少ない傾向にある。今回の調査地も、石器の出土状況から、同様の傾向があると思われる。

【参考文献】

大久保知巳 1987「第一章原始」『波田町誌 歴史現代編』波田町教育委員会

大久保知巳他 1995『草原遺跡Ⅱ 緊急発掘調査報告書』波田町教育委員会

小林康男 1995「2. 石器Ⅰ 組成論」『縄文文化の研究』7 雄山閣

松本市教育委員会 2020『麻神遺跡 一第3次発掘調査報告書一』

順 号	種 類	調査区	遺構	出土地点 など	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考	
1	磨製石斧	A	土5		頁岩	4.86	2.23	0.65	11.2	完形	側面断面が扁平方形形、刃部(断面)が凸凹、平面(側面)が直、基部平面形はほぼ平基	
2	2	掘削	A	P48	チャート	2.84	3.17	0.89	6.4	完形	両面加工、加工部は直面部、直刃、刃長1.40cm	
3	割片	A	P50		黒曜石	2.24	2.77	0.81	4.1	完形		
4	2次加工ある割片	A	検出面		黒曜石	1.68	1.49	0.41	0.7	完形	2繰追加加工	
5	割片	A	検出面		黒曜石	1.59	0.93	0.20	0.2	完形		
6	割片	A	検出面		黒曜石	1.01	0.51	0.25	0.1	完形		
7	砥石か	A	検出面		砂岩	(4.85)	(3.73)	(2.35)	(11.4)	3/4欠	住1蔵	
8	砥石か	A	検出面		砂岩	(3.29)	(4.27)	(2.59)	(21.6)	3/4欠	中蔵	
9	割片	A	検出面		チャート	4.30	3.23	0.69	8.0	完形		
10	割片	A	検出面		チャート	3.41	2.84	0.88	5.3	完形		
11	砥石か	A	表土		砂岩	(4.02)	(7.96)	(4.13)	(150.1)	3/4欠	中蔵	
12	石核	A	表土		チャート	3.56	4.72	2.15	29.9	完形	打面2、作業面2	
13	4	打製石斧	B	1住	安山岩	11.68	4.51	2.06	127.1	完形	刃(急)、側縁形、自然面のみ残存、刃縁から側縁にかけて磨滅	
14	3	掘削	B	2住	黒曜石	2.85	1.62	0.63	1.8	完形	縦長割片、側面から加工、加工部位未端、直刃、刃長1.34cm	
15	砥石	B	溝状遺構	西側	安山岩	11.76	3.85	2.68	227.7	完形		
16	砥石	B	溝状遺構	西側	石英	3.72	3.23	2.68	30.1	完形		
17	打製石斧	B	溝状遺構	西側	ホルンフェルス	(9.54)	(5.21)	(1.30)	(66.9)	1/4欠 (刃部と基部欠)	側縁形、自然面残存	
18	石核	B	溝状遺構	西側	チャート	2.93	2.81	2.63	16.0	完形	打面(急)、側面・側縁面、調整なし、転移2、角度(度合)、作業面(急)、側面	
19	砥石	B	溝状遺構	西側	石英	3.02	3.30	2.05	18.7	完形		
20	5	打製石斧	B	溝状遺構	ホルンフェルス	12.14	4.15	2.10	120.0	完形	斜刃(急)、側縁形、刃面に鋭角、刃縁・側縁に磨滅	
21	割片	B	溝状遺構		チャート	2.64	3.56	0.79	8.3	完形		
22	6	打製石斧	B	溝状遺構	ホルンフェルス	7.42	3.46	1.08	29.9	完形	刃(急)、側縁形、側縁から削らせた形状、側縁に磨滅	
23	1	掘削	B	溝状遺構	チャート	(6.13)	(6.85)	1.60	(39.5)	1/4欠	両面加工、加工部位未端、直刃、刃長5.98cm	
24	割片	B	東壁	黒色土内	チャート	3.54	2.55	0.80	5.9	完形		
25	9	磨石類	B	表土	砂岩	(10.30)	6.95	4.30	(459.7)	1/4欠	平面形楕円形、断面形楕円形、表面(表面1、表面2)、磨打痕(表面2、表面3、表面5)	
26	打製石斧	B	溝土		頁岩	(5.92)	(6.28)	(2.27)	(129.7)	1/2欠 (側部のみ残存)	自然面残存、側縁に磨滅	
27	7	打製石斧	B	試掘	トレンチ1	ホルンフェルス	11.07	4.93	1.40	80.3	完形	斜刃(急)、側縁形、自然面残存、刃縁に磨滅
28	石核	B	試掘	トレンチ1	チャート	2.88	4.30	4.20	47.3	完形	打面(急)、自然面・側縁面、調整なし、転移1、角度(度合)、作業面(急)、側面・自然面	
29	割片	B	試掘	トレンチ1	チャート	3.47	3.50	1.19	12.5	完形		
30	2次加工ある割片	B	試掘	トレンチ1	粘板岩	3.62	2.61	0.88	8.9	完形	2繰追加加工	

※()内数値は残存部を表す。

※1.200g未満は0.1g単位。

第3表 石器一覧表



B区 作業風景



第10圖 石器

第IV章 総括

上野遺跡は、松本市波田地区の東部に位置する遺跡である。波田地区には縄文時代の集落跡が数多く存在し、中でも本遺跡の周辺は遺跡の分布密度が高い地帯のひとつに挙げられている。松本市教育委員会による調査は今回が初となるが、これまでの現地踏査で縄文土器片や石器が採集されている。それらの時期から、上野遺跡は隣接する草原遺跡と同様、縄文時代中期から後期にかけて展開した遺跡であると推定されてきた。

今回の調査では、2カ所の調査区をそれぞれA区、B区と設定して調査を実施した。A・B区ともに東側に攪乱を受けていたものの、調査区全体からは縄文時代中期中葉～後期の遺構と遺物を確認した。

A区では多数のピットと土坑が確認された。ピットの中には、A区東側において南北へ列状に並ぶ様子のもも確認できたが、ピットの周辺に密集する攪乱により、その全容は把握できなかった。また、土坑では直径約1m、深さ約30cmの土4から縄文時代中期中葉の深鉢が良好な状態で出土した。

B区では竪穴住居跡が2軒、切り合った状態で確認された。ここからは縄文土器片や打製石斧、搔器などが出土しており、時期は2軒とも縄文時代中期中葉のものであると推定される。調査区の西端で一部のみ確認されたことから、この集落の居住域はB区より北側に展開している可能性がある。また、幅約3mの東西にのびる溝状遺構もB区から確認された。溝が掘られた時期や用途は不明だが、規模や向きなどから、人為的に掘削されたものである可能性が高い。その範囲は上野遺跡の外まで続く可能性も考えられ、近隣の遺跡との関係が注目される。

遺物の時期は、縄文時代中期中葉～後期の土器片が出土しており、長い期間の中で集落の活動があったことが窺える。また、中世の遺物も少量ではあるが出土している点などから、付近に中世遺構が存在していたことも示唆される。なお、B区に隣接する草原遺跡から、中世の墓塚とそれに伴う遺物が確認されている。

石器の出土状況は、打製石斧の占める割合が大きかった。これは打製石斧の出土量が他の器種に比べて多いという、中部地方の中期～後期の縄文遺跡が持つ傾向と一致している。周辺の草原遺跡や麻神遺跡も同様の特徴を持っており、例外ではない。

今回の調査区は上野遺跡の西端に位置し、さらに50mほど西には、上野遺跡と同じく縄文時代中期～後期の集落遺跡である草原遺跡が広がる。B区西端で確認された竪穴住居跡の一部や、東西に延びる大規模な溝状遺構は、上野遺跡の規模を把握する手掛かりとなり得るほか、周辺遺跡との関連も窺わせるものであると考える。



B区1・2住 作業風景

最後に、本調査の実施と刊行にあたり、多大なるご理解とご協力をいただいた中部電力株式会社電力ネットワークカンパニー長野支社並びに関係機関各位、波田2区町会をはじめとする地元の皆様、発掘作業に携わったスタッフの皆様には深甚なる感謝の意を表して、本書の結びといたします。

写真図版 1



A区全景 (南から)



B区全景 (北から)



A区検出状況(南から)



B区検出状況(北東から)



A区基本土層(西壁)



B区基本土層(南東壁)



A区 列状に並ぶピット(東から)



A区土2 土層(西から)



A区土4 土器出土状況1(東から)



A区土4 土器出土状況2(東から)

写真図版 3



B区1住ピット1 土層 (北東から)



B区1住 完掘状況 (北東から)



B区2住 礫出土状況 (北東から)



B区2住 完掘状況 (北東から)



B区土11 礫出土状況 (南から)



B区溝状遺構 完掘状況 (北東から)



B区溝状遺構 東壁土層 (北側)



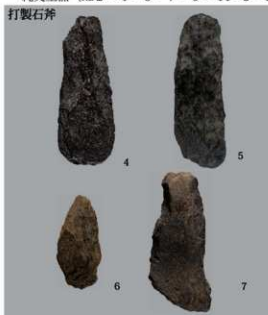
B区溝状遺構 東壁土層 (中央部)



縄文土器 (No.2・4・5・7・9~11:S=1/4, No.12~27:S=1/3)



削器・搔器



打製石斧



磨製石斧

磨石類

削器・搔器・磨製石斧 (No.1~3・8):S=2/3、打製石斧・磨石類 (No.4~7・9):S=1/3

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし うえのいせき はつくつちょうざほうこくしょ							
書名	長野県松本市 上野遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.242							
編著者名	白鳥文彦、高山いず美、吉澤せり子							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2021(令和3)年3月31日(令和2年度)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
うえの 上野	ながのけんまつもとし 長野県松本市 はたあざうえの 波田字上野 はな 1808番2ほか	20202	1801	36度 11分 23秒	137度 51分 52秒	20190819 (R1.8.19) ～ 20191001 (R1.10.1)	254㎡	送電線鉄塔 移設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上野	集落跡	縄文	竪穴住居 (第1～2住) 2軒 土坑 10基 ピット 58基 溝状遺構 1条	[土器] 縄文土器 [石器] 削器 搔器 打製石斧 磨製石斧 磨石類		・縄文時代中期～後期の集落跡の一部を調査した。 ・縄文時代中期中葉の竪穴住居を2軒重複して検出した。 ・時期不明の大規模な溝状遺構を1条検出した。 ・縄文時代中期中葉～後期の土器と石器が出土した。		
要約	上野遺跡の第1次調査で、送電線鉄塔移設事業に伴う緊急発掘調査として実施した。竪穴住居を中心とする縄文時代中期～後期の集落跡を確認し、同時期の土器・石器などの遺物を得た。A区からは縄文中期中葉の深鉢が良好な状態で出土した。B区からは縄文中期中葉の竪穴住居2軒の一部と、溝状遺構1条が検出された。竪穴住居は互いに重複した状態で確認されている。溝状遺構は時期や用途は不明だが、規模や方向などから人為的に掘削された可能性が高く、遺跡外、近隣の遺跡まで続くことが考えられる。							

松本市文化財調査報告 No.242

長野県松本市

上野遺跡

—発掘調査報告書—

発行日 令和3年3月31日

発行 松本市教育委員会

〒390-8620

松本市丸の内3番7号

印刷 精美堂印刷株式会社